

【記事等】

攻撃と防御はどちらが有利か — その問いの現代的意味を考える —

岩上 隆安

はじめに

攻撃と防御では、どちらが有利な戦術行動なのか。クラウゼヴィッツ（Carl von Clausewitz）は、19世紀半ばに防御有利と考えた。総力戦となった第一次世界大戦後、ロシア軍事界は攻撃有利へと傾倒した。さらにゲラシモフ

（Valery Gerasimov）ロシア連邦軍参謀総長は2013年に、「ハイブリッド戦争」を念頭に今後は攻撃と防御との区別がなくなるだろうと述べるに至った。三者の評価は、何故異なるのか。攻撃と防御という戦術行動が固定的であれば評価は変わらないのであろうが、その変化には何が影響しているのだろうか。

ここでは、戦場で戦闘力を使用する方法である戦術の主要な論点をクラウゼヴィッツの観察を起点として、第一次世界大戦以降の総力戦から現代のハイブリット戦に至る戦争の様相の変化を中心に考えてみたい。攻撃と防御に関しては、従前桑田悦教官がクラウゼヴィッツの観察を批判的に捉えて考察されているが、ここでは同観察を肯定的に捉えて、両者を別の視点から捉えることを試みる。これは個人の見解であり、防衛省、陸上自衛隊の見解ではない。

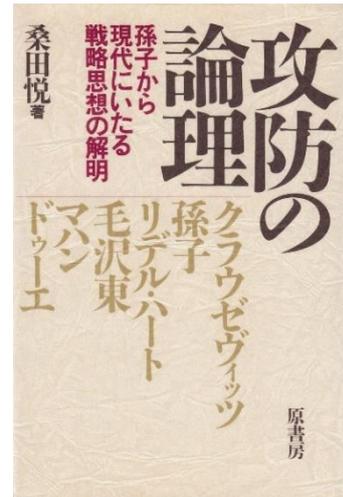
1 クラウゼヴィッツの観察とそれへの批判

近代軍事理論の基礎を築いたクラウゼヴィッツは1832年刊行の『戦争論』で、「用兵において防御は、それ自体が攻撃よりも強固だ」と述べた、その理由は、防御の目的は現状維持であり、そもそも何かを獲得するよりも容易である。しかも、防御側は自ら動くことがないので、攻撃側の浪費する時間や不作為が全て防御側の利益になるからと語った（クラウゼヴィッツ、245頁）。

彼はまた、防御とは敵の攻撃を阻止することであり、その特徴は攻撃を待ち受けることであるとも述べた（同244頁）。つまり、戦闘の主導権を敵に委ね、敵が自陣の前面に現れるのを待つ場合、規模の大小を問わず防御的と彼は考察した。いわば、クラウゼヴィッツは、防御を現状維持の目的を達するため、敵の攻撃を待ち受け阻止することと考えていた。

他方、クラウゼヴィッツは、防御で戦争目的が達成できるとも考えていなかった。彼によれば、絶対的な防御というようなものがあれば、それは相手に自らの意志を強要するための実力行使という戦争の概念と完全に矛盾するからという（同 244 頁）。つまり、彼は防御は攻撃よりも有利ではあるが、戦争である以上はどこかで攻撃が含まれることも想定していた。

これに対して、桑田悦防衛大学校教授（当時）は 1991 年に、クラウゼヴィッツの思考過程などは 1 つの視点として傾聴に値する点もあるが、「防御の有利性として具体的に主張する内容には、今日から見て甚だ理解しかねる問題を孕んでおり、さらには相当に無理な論理展開もあるように思われる」として批判した。そして、その理由として桑田は、クラウゼヴィッツが「防御戦争」と「戦略守勢・防勢作戦」を混同している、火力発揮への関心が乏しい、攻撃の主導性と先進的有利さとを過小評価しているという 3 点を挙げた（桑田、pp.42-44）。



『攻防の論理』

2 第一次世界大戦以降の総力戦

1914 年 7 月に勃発した第一次世界大戦では、パリの包囲を狙ったドイツ軍の攻勢が 9 月にパリ東方のマルヌで膠着した後、双方が互いに陣地の弱点である翼側を攻撃しようと塹壕を伸ばす延翼行動が行われた。そして、双方が延々と陣地の争奪戦を繰り広げた結果、戦争はヨーロッパ全体を戦場とする泥沼の長期戦になった。これを攻撃、防御で区別して述べれば、そこではドイツ軍の当初の攻撃が頓挫した後、防御側のフランスと並び、ドイツも防御に移行したということになる。

しかしながら第一次世界大戦では、世界の推定人口が約 18 億人のところ、1918 年の終戦時には全体で 7,000 万人が動員され、莫大な物資と戦費が投じられたばかりか、そこで各国が戦局打開のため、兵士の大量動員に加え、戦車、航空機といった新兵器や化学兵器を導入した結果、戦死者 900 万人、負傷者 2,000 万人のほか、700 万人の市民の犠牲を出した。このため、戦後はこうした惨禍が繰り返されることのないよう、侵略戦争の違法化や集団安全保障体制構築の議論が進展した。その一方で、万が一の際に国家が戦いに勝つために

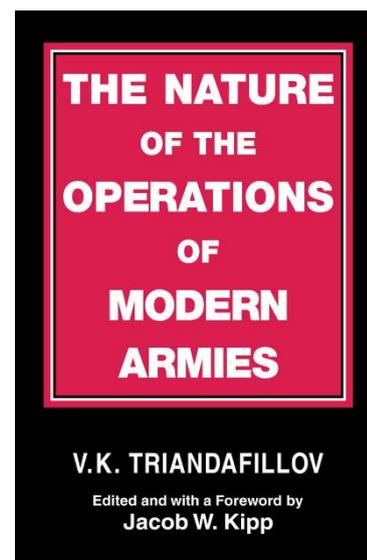
は、兵士の動員能力もさることながら、戦争当事国を中心に国家の兵器、機械生産力、さらにはそれを支える経済力が重要であると認識されるようになった。つまり、戦争の惨禍に直面した各国政府は、戦争を忌避するようになった半面、軍事界では万が一のためにもそうした惨禍が繰り返されないよう、戦勝獲得のために戦い方の見直しを志向した。

そうした見直しは例えば、政治は軍事目的に奉仕すべきと主張したドイツのルーデンドルフ（Erich Ludendorff）のほか、空軍主体の戦争を構想したイタリアのドゥーエ（Giulio Douhet）、戦場での戦闘以前に敵の物心の均衡を崩す間接アプローチを提唱したイギリスのリデル・ハート（Basil Liddell Hart）といった陸戦を極力回避する戦略につながった。このほか、西側各国軍では小規模な機械化部隊による敵の指揮の破壊を目指したイギリスのフラー（John F. C. Fuller）や、部隊の自動車化、機械化を主張したドイツのグデーリアン（Heinz Guderian）など影響は陸戦要領の見直しに及んだ。

3 ロシア軍事界の攻勢有利への傾倒

これに対して、ロシア軍事界は如何に反応したのだろうか。ここではトリアンダフィロフ（Vladimir K. Triandafillov）を取り上げる。彼の構想は、彼の航空機事故後もロシア軍事界に残って、第二次世界大戦期のロシアの陸戦の基調となり、冷戦末期にはグラスノスチもあって西側軍事界に広まった。それはまた、米国高等軍事研究大学院（SAMS）のカリキュラムに取り入れられ、湾岸戦争の作戦構想にも活かされたのでロシア軍事界の影響力ある構想と評しても差し支えないだろう（Triandafillov, pp.vii-viii, xxv-xxvii）。

彼は当時の技術革新を念頭に攻勢有利に傾倒し、連続作戦理論を構想した。その背景には、当時重いもので16 kgあった小銃が軽量化されるとともに発射速度が増大すること、また大砲の2割から8割程度の長射程化と弾丸効果の増大、さらには戦車、航空機、通信の発達や化学攻撃が現実化したことがあった（Triandafillov, pp.9-26）。そこで、彼はその地に留まる防御は不利と見る。



『THE NATURE OF THE OPERATIONS OF MODERN ARMIES』

彼は逆に、軽量化された小銃を装備した歩兵が、鉄道で長距離移動して敵から2日行程の距離をとって展開。戦場では、航空偵察とその結果を受けた空爆と大砲の支援下、まず戦車と連携して機動し、敵第一線の一部から突破して前線を流動化させる。次いで、後続部隊が戦果を拡張する間に、航空機が縦深を爆撃することで敵の混乱に陥れて倒す打撃軍を編成することを提唱する。1コ打撃軍は、4コ軍団（12から18コ師団）と4コ砲兵師団で構想された。また、打撃軍は複数で運用され、外線態勢から最低2軸で機動して、当初の5から6日間で30～36キロメートル前進、次の20日間で150～200キロメートル前進したうえで、さらに30～50キロメートル敵方で決戦を行うという

(Triandafilov, pp.90-144)。ノモンハンで日本陸軍を苦境に陥れ、東部戦線でドイツ機動部隊を徐々に蚕食していった事実を思えば、この攻撃的な構想がどれだけ強靱なものだったのかが窺い知れる。

4 攻撃、防御の区別の不明瞭化

ゲラシモフ参謀総長は2013年、旧ソ連国家に波及したカラー革命を念頭に戦争のルールが変化したと認識した。そこでは成熟した国家であっても、数日から数か月のうちには激しい武力紛争の舞台となったり、外国の干渉を受けたりして、ネット空間で中傷されるばかりか、実際に人道災害や内戦になった事実を承知したからである。彼はまた紛争の焦点が、政治、経済、情報、人道やその他の非軍事的手段に移行しており、特殊作戦を含む公然たる武力行使は小規模であっても紛争解決の最終段階に限定されると考察した。さらに彼は技術革新により伝統的な手段のみならず、今まで構想しなかったような手段が考案される可能性にも言及した (Gerasimov, p.24)。

このため、彼は今後の軍事的行動はより動的で、積極的で実効的になると予測した。具体的には情報技術の発達に伴い、敵の奇襲を許すような戦術的、作戦的な休止はなくなり、司令部と部隊間の空間的、時間的、情動的な格差が減少し、大規模部隊による近接戦闘は過去のものとなる。その代わりに長距離精密射撃などでの非接触下の行動が作戦、戦闘の主要な手段となる。つまり、目標へ打撃が常時、かつ随所に行われることになるため、戦略、作戦、戦術の区別や平時と有事の区別とともに攻勢作戦と防勢作戦の区別も消滅すると彼は考えるに至った (Gerasimov, pp.24-25)。

5 考 察

クラウゼヴィッツは、ナポレオンが西欧を席卷した時期の戦争を念頭に防御の有利を主張したと考えるのが妥当である。彼が当時存在しない行動で比較すると想定することは非現実的だからである。であれば、彼の念頭にあった攻撃とはナポレオンが行ったような歩兵主体の国民軍の機動による行動であり、同じく防御は要塞戦を極限とした火力主体の行動であっただろう。よって、小銃を主体として要塞を攻める困難を思えば、防御有利の観察は妥当と言えるだろう。しかも、第一次世界大戦のドイツは当初の失敗を局限するために全般として有利な防御を選択したと評価できることから、同大戦時その観察は有効だったと考えられる。

その後、攻撃と防御は、第一次世界大戦で総力戦下の消耗戦に直面したことで、戦後の各国政府の戦争への忌避感や各国軍の構想とともに変化した。折しも、技術革新により小銃、機関銃が改良された。また、火砲の弾丸威力が増大するとともに長射程化が推進され、戦車や航空機も改良されたうえに、化学攻撃が巧妙化した。さらに、通信によりそれらの連携が可能になった。そこで、各国軍は一地に留まる防御を敬遠し、運動戦や機動戦といった動きながら戦う方策を志向する。そして、それが諸兵科連合などとして攻撃有利への傾倒につながった。よって、ここを見てクラウゼヴィッツの主張を批判した桑田教官の指摘も時宜に適していたと言えるだろう。ちなみに、令和5（2023）年5月に改訂された『FM3-90 Tactics（戦術）』でも、アメリカ合衆国陸軍は防御を軍の主導性奪回の条件を作為するものと位置付けている一方で、攻撃は敵軍に我が意志を強要するための究極的手段と位置付けており、攻撃有利の判断は現代でも継続していると考えられる。

そう考えると、攻撃と防御の有利さは不変ではなく、その構想、技術革新によって評価が変化することが認識できる。つまり、攻撃と防御とどちらが有利なのかを問うことは、その概念的な利、不利を問うだけでなく、行動に由来する構想やそれに活用される技術を加味して考察するのと同義なのである。従って、どちらが有利なのかを判断することは、その時代のそれらを勘案しないと適切にならない。その意味で我々は攻撃、防御の概念上の利、不利を問うよりも、その時代の攻撃、防御とはどのような行動なのかを具体化の方が実効的なかもしれない。

現代では、例えば超限戦、ハイブリッド戦争や複数領域作戦（MDO）のよ

うに従前戦闘が生起すると想定されていた戦場が、陸上、海上、空中から宇宙空間に拡大するとともに、インターネットなどの仮想空間や人間の認知にまで拡大している。また、時間もサイバー、極超音速兵器の実用化やAI、ビッグデータの導入により、ニアリアルタイムでの判断や行動が求められることで短縮している。さらにそこでは、行動主体が軍隊から民兵や民間軍事会社、延いては外交、情報、経済にまで拡大したうえに、手段もサイバー戦、電子戦、心理戦、認知戦といったノンキネティック手段の活用を含めた非軍事の戦争行動や非戦争の軍事行動が提起されている。つまり、現代では従前には軍事として認識されない行動が、戦争として捉えられるようになった。

ここを見て、米陸軍はFM3-90を改訂した。他方、先述の格拉シモフ参謀総長は、如何なる行動を考えているのだろうか。現時点に具体的発言を私は知らないが、ウクライナ戦争の今後にその答えが出るかもしれない。

いずれにせよ、使用する空間が拡大し、短縮した時間の中での対応が求められる今後の戦場での行動を、攻撃や防御と呼ぶのであればそれはそれでよい。しかし、そこでは次なる戦争の様相は如何なるものかを構想しながら、そこでの勝ちとは如何なるものかを定義すること。また、今後の戦場を規定したうえで、そこで勝つための非軍事主体、非軍事手段、さらにはノンキネティック手段を含めた方策の具体化が必要なのだろう。

おわりに

戦術は、戦場で戦闘力を使用する方法とするクラウゼヴィッツの定義に基づけば、国防を担う自衛隊の本来的な方法論とも言える。よって、その実効性如何は、陸上自衛隊の強靱性に直結する。

翻って例えば、クレマンソーは第一次世界大戦後に「戦争は軍人だけに任せておくにはあまりにも重大なビジネスだ」と語った。現に、国際連合憲章では違法戦争観が規定されており、また戦争の無限界性を念頭に置けば、核兵器の登場によって、戦争は極限において、人類滅亡が自覚されるため、軍事力行使の敷居は極めて高くなっている。しかも、ヴェトナム戦争では、米軍は敵戦闘力の撃破に偏重して敗北した。つまり、現代では戦争は複雑さを増している一方で、軍事力は使用への敷居は高まっているうえに、その実効性にも疑問がある。これは軍事全体の意義低下とともに、戦術の意義低下も意味しているのではないだろうか。

ここに至って戦術が変化しないと考えるのは、戦術は戦争の一部であるにもかかわらず、戦術を戦争の変化と切り離して考察していることになり、実際的でない可能性がある。少なくとも、その考えでは戦術は戦争の様相の変化の中で孤立してしまうだろう。いわば、超限戦、ハイブリッド戦争や複数領域作戦が提起されている今、我々には従前原理原則の枠で捉えてきた戦術から脱して、陸上自衛隊のそれを現代に適合させる努力が求められているのである。今、攻撃と防御の有利性を問う意味を私はここに見出したい。

但し、ここでは戦術の長い歴史をごく単純化して考察しており、その正鵠を射るには細部観察する必要があるが、じ後の課題とする。

【参考文献】

岩上隆安「陸上自衛隊への新概念の専門部隊導入について： 「次なる戦争」の視点からの考察」『戦略研究』31、令和4年。

カール・フォン・クラウゼヴィッツ『縮訳版 戦争論』加藤秀治郎訳、日本経済新聞出版、2020年。

桑田悦『攻防の論理： 孫子から現代にいたる戦略思想の解明』原書房、1991年。

V.K Triandafilov, *THE NATURE OF THE OPERATIONS OF MODERN ARMIES* (Oregon, US: FRANK CASS, 1994) .

Valery Gerasimov, "The Value of Science Is in the Foresight: New Challenges Demand Rethinking the Forms and Method of Carrying out Combat Operations," *Military Review*, Jan.-Feb. (2016) .

※ 本稿は、『修親』令和6年8月号に掲載されたものに一部加筆、修正したものです。